吉備の古代史シリーズ　第８回

素戔嗚尊の剣（下）――どんな形だったか？

「邪馬台国時代の北部九州と酷似」

NPO 法人福岡歴史研究会副理事長　石合　六郎

＜はじめに＞

前回はいくつかの新資料により思いがけない展開になり、スリリングな古代史探求を筆者自身も体験できた。さて「十握（とつかの）の剣」（布都斯御魂の剣）はどのような形をしているのであろうか。今回、吉備に伝わった剣の流転の足跡がわかり、最終的に石上神宮におさまったことがほぼ明らかになった。しかも、そのレプリカがあることも判明した。それらからその形をある程度伺い知ることができそうである。古事記、日本書紀の記述に注目しながら、その挑戦を始めてみよう。また、考古学的成果にも注目したいと思う。どんな結果が出るか、古典文献と公開情報を比較しながら探ってみる。

筆者がインターネットで偶然購入した素戔嗚尊の大蛇退治の掛け軸。天叢雲が描かれていて、これから退治に向かうのか、終えた後かは不明だ。

＜1＞古事記、日本書紀に記される剣

十握（とつか）の剣は人の手で十握りの長さ（ひと握りは約８.５～９.５センチ）があるという意味で、おおよそ 90 センチ前後といわれている。本来、剣の形態で固有名詞ではないが、固有名詞的に使われることもままある。古事記、日本書紀に登場する十握の剣（十束、十拳、十掬の表記もある）はおおよそ６振り、これに八握（やつか）の剣、九握（ここのつか）の剣も含めると１０振り以上になる。

〔1〕天之尾羽張剣（あめのおはばりのつるぎ）（伊都尾羽張剣（いつのおはばりのつるぎ））

古事記では十拳剣（とつかのつるぎ）と表記され、伊邪那美命（いざなみの）が火の神・火之迦具土神（ほのかぐつちかみ）を生んだ時、「みほと炙（や）かえて病み、遂（つい）に神避（かみさ）り」。これに怒った伊邪那岐命が「御佩（はか）せる十拳剣を抜きて、その子迦具土神（かぐつちのかみ）の頸を斬りたまいき。」（「岩波文庫」倉野憲司校注ｐ２５）とある。「斬りたまひし刀の名は、天之尾羽張剣（あめのおばはりのつるぎ）と謂（い）ひ、亦の名は伊都尾羽張剣（いつのおはばりのつるぎ）と謂（い）ふ」（同ｐ２６）。

迦具土神を殺したあと、伊邪那岐命は、伊邪那美命のことがあきらめきれず、黄泉の国を訪れ、愛しき妻に会い「吾と汝と作れる国、作り竟（を）へず。故、還るべし。」と連れ戻そ

うとするが、かなわず、伊邪那美の蛆のたかる遺体を見たことで黄泉醜女や千五百の黄泉軍らに追われることになる。この時、伊邪那岐命は「御佩せる十拳劔を抜きて、後手に振きつつ逃げ来るをなお追ひて、黄泉比良坂の坂本に到りし」（同ｐ２７）と。ここで再び迦具土神を殺した十拳劔が登場し、防戦に活躍している。この後、桃子三箇の霊力が語られ、千引の石を隔てて伊邪那美と伊邪那岐は互いに「事戸」（註１）を言い渡す。

この十拳劔がどうなったかは記されていないが、迦具土神の神の頸を刎ねたとき、剣の先と本（刀の柄＝握り手部分）に著ける血から流れ出た血によって八柱の神が生まれる。その中に、建御雷之男神（男がある場合とない場合がある。またの名は建布都神、豊布都神）がいる（同ｐ２５）。この神が出雲での国譲神話で活躍、十握の剣を使っている。

〔２〕天安河誓約の剣

伊邪那岐神から追放をいい渡された建速須佐之男命が母（妣）の国に行うとし、その前に高天原の天照大御神のもとへ「罷り往く状を請むと以為ひてこそ参上りつれ。異心無し。」（挨拶だけで悪いたくらみはない、同ｐ３３）と述べ、天安河を挟んで（または眞井で）、誓約という占いをすることになる。その場面で、「天照大御神、まづ建速須佐之男命の佩ける十拳を乞ひ渡して、三段に打ち折りて、瓊音ももゆらに、天の眞名井に振り滌ぎて、さ噛みに噛みて、吹き棄つる氣吹のさ霧に成れる神の御名は…」（同ｐ３４～３５）と続き、いわゆる宗像三女神（多紀理毘賣命、市寸島比賣命、多岐都比賣命）が誕生する。建速須佐之男命は剣ではなく御統の珠などを乞ひ、正勝吾勝速日天之忍穂耳命、天之菩卑能命、天津日子根命、活津日子根命、熊野久須毘命の男の神が生まれている。

天照大御神は生まれた物實の持ち主が、親だだと宣言する。剣や珠から人が生まれることはもちろんない。「誓約という占い」自体がどのようなことなのか、記紀に登場する言葉の中で最も難解なもののひとつであろう。いろんな説はあるが、納得できる示唆も見当たらない。

また、日本書紀だが、誓約の段の一書の第一に天照大神が素戔嗚尊を迎え撃とうと高天原の防備を固めようとする時、「躬（みずから）に十握剣・九握剣・八握剣を帯き…」（岩波文庫「日本書紀」坂本太郎ら校注ｐ６６）とある。当時、いろんな種類の剣があったことがわかる。

〔３〕天之羽々斬剣

この剣は前回の剣の流転でわかったように出雲から吉備（石上布都魂神社）に持ち込まれ、崇神朝期に吉備津神社（同神社の元宮）へ移り、仁徳朝期に大和の石上神宮に安置されている。素戔嗚尊（古事記では須佐能男命）がこの剣で大蛇を退治したと伝えられ、正

式な名前は「布都斯御魂」とされる。天之羽々斬剣以外に天十握剣、蛇之麁正剣、蛇之韓鋤剣、天蠅斫剣の名もある。大蛇退治のさまを古事記では次のように表現している。

「その八俣大蛇、信に言ひしが如来つ。すなはち船（酒のはいいた入れ物）毎に己が頭を垂入れて、その酒を飲みき。ことに飲み酔ひて留まり伏し寝き。ここに速須佐之男命、その御佩せる十拳劔を抜きて、その蛇を切り散りたまひしかば、肥河血に變りて流れき。故、その中の尾を切りたまひし時、御刀の刃毀けき。ここに怪しと思ほして、御刀の前もちて刺し割きて見たまへば、都牟刈の大刀（註２）ありき。故、この大刀を取りて、異しき物と思ほして、天照大御神に白し上げたまひき。こは草難の大刀なり。」（同ｐ４０，４１）

十握の剣を振り上げ大蛇を退治する素戔嗚尊（備中神楽）＝三村信祐氏（中世夢が原園長）提供

日本書紀には「蛇を断りたまへる剣は、今吉備の神部の許に在り。」（岩波文庫「日本書紀」坂本太郎ら校注ｐ９８）とある。古事記は触れていないが、古語拾遺や先代旧事本紀にもある。

〔４〕布留御魂神

饒速日の尊は、高天の原から降臨のさいに、十種の瑞宝を、天神の祖から与えられた。十種の瑞宝の中に八握剣がある。他の羸都鏡・邊津鏡・生玉・足玉・死返玉・道反玉・蛇の比札・蜂の比札・品物比礼の九品の宝とともに石上神宮にある。瑞宝の経路は、饒速日の尊の子の宇摩志麻治の尊が神武天皇に献った。先代旧事本紀によると崇神天皇の 七年に、前項の布都御魂剣と同様に物部の祖の伊香色雄の命が、石上の高庭に移したとしている。

〔５〕大量（神度剣）

あまり知られていない剣の名前だが、天若日子の葬儀で阿遲鉏高日子根神が持っていた十束剣のことである。 正式名を『古事記』では大量、『日本書紀』では大葉刈と表記される。別名として『古事記』では神度剣、『日本書紀』では神戸剣とも表記される。

弔われる天若日子と阿遲鉏高日子根神は義理の兄弟で、顔かたちが似ていたことから死人と間違われ、それに怒り「御佩せる十掬劔を抜きて、その喪屋を切り伏せ、足もちて

蹶ゑ離ち遣りき。こは美濃國の藍見河の河上の喪山ぞ。」（「岩波文庫」倉野憲司校注ｐ５９）。

阿遲鉏高日子根神は出雲国の貴族であったろう。葬儀には正装で現れたのだから、当時の成人貴族は公式の場で刀剣を身に着けていたのだろう。喪山の伝承地は岐阜県美濃市に２カ所ある。出雲から美濃まで飛ぶわけもないが、どんな事情でこの伝承が生まれたのか興味深い。

〔６〕韴霊剣（布都御魂剣）

この剣がいわゆる平国の剣だ。建御雷の神が大国主の神に国譲りをせまったことになっている。佐士布都の神、甕布都の神とも呼ばれ、布都御魂剣、韴霊とも記される。

国譲りの場面で「（建御雷神は）十掬剣を抜きて、逆に浪の穂に刺し立て、その劔の前に趺み坐して、その大國主の神に問ひて言りたまひしく」（同ｐ６１）と国譲りを迫る。結果は二人の子供（八重言代主神、建御名方神）も最終的には同意する。建御雷神が出雲へ国譲りの談判に行くのが決まる前に、天照大御神が「曷れの神を遣はさば…」と問い、思兼神が伊都之ば尾羽張神（建御雷の神の父親）を推薦する。この神のところへは、「逆に天の安の河の水を塞き上げて、（だれでも）得行かじ。天迦久神を遣はして問ふべし」となった。天尾羽張神（伊都尾羽張剣から生まれた八柱の神のひと柱）は「この道には、僕が子、建御雷神を遣はすべし。」と答えた。あわせ天鳥船神を副えることになった。

また、神武天皇が東征の時、熊野の高倉下を介して、神武天皇にさずけられ、熊野平定時に霊威を示した。『旧事本紀』によれば、神武天皇は、即位後、物部氏の遠祖の宇摩志麻治の尊にその神剣を奉祀させた。石上神宮の社伝では崇神天皇の七年に物部の連の祖の伊香色雄の命が、勅を奉じて宮中から石上の高庭に移したという。

甘木の尾拂は建御雷の故郷か

安本美典氏はかつて建御雷神の父尾羽張神が住んでいたのは朝倉市甘木の尾拂と述べていた。最近は肯定的ではないようである。しかし、筆者は尾拂地区が江川ダムの建設で水没しており、ここは塞き止めやすい地形で人が行きにくかったこと、それに「おばらい」と「おばはり」の音の近さを考えると、その可能性はあると思っている。

右は明治３３年の地図で、鳥居の印がある。この神社はダム湖沿いの道路に面して、高木神社（江川）として、移転し現存している。高木の神は天照大御神とともに高天原の最高権力者だった。

〔7〕その他

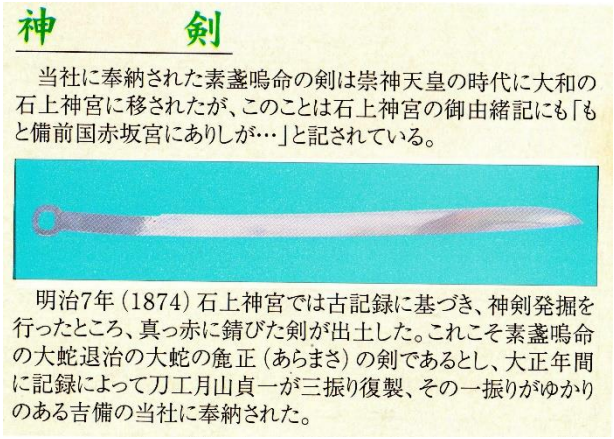
山幸彦と海幸彦の説話では、山幸彦が海幸彦の釣り針を無くしてしまったため、「その弟、御佩(みはかし)の十拳劔を破りて五百鉤(いおはり)を作りて、償ひたまへども取らず。また一千鉤(ちはり)を作り作りて…」（同ｐ７１）とある。

仲哀天皇の熊襲征伐の途次、岡県主の熊鰐、伊都県主の五十迹手がそれぞれ白銅鏡、八尺瓊と共に十握剣を差し出して降伏している。

＜2＞内反りの剣だった

◎覗き見れるお姿

古代の刀剣が残ることは、考古学的な発掘を除いて奇跡に近いことだろう。考古学の場合は「もの」はあっても由来について特定できない場合が多い。


神　　剣

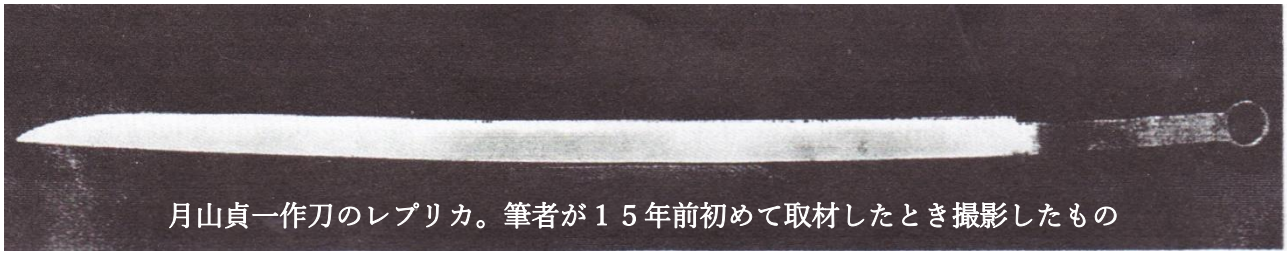
当社に奉納された素盞嗚命の剣は崇神天皇の時代に大和の石上神宮に移されたが、このことは石上神宮の御由緒記にも「もと備前国赤坂宮にありしが…」と記されている。

明治7年（1874）石上神宮では古記録に基づき、神剣発掘を行ったところ、真っ赤に錆びた剣が出土した。これこそ素盞嗚命の大蛇退治の大蛇の麁正（あらまさ）の剣であるとし、大正年間に記録によって刀工月山貞一が三振り復製、その一振りがゆかりのある吉備の当社に奉納された。

石上布都魂神社の案内書きから

そのような中、菅政友が、明治７年に禁足地から掘り出した剣は、直ちに御神体として収蔵庫に安置された。そのあと人間国宝で帝室技芸員の初代月山貞一（註３）によりレプリカが３振り作られた。同神宮と皇室に収められ、岡山県赤磐市の石上布都魂神社にも奉納された。同神社でもご神体に準ずる扱いをされている。案内書きに写真（上）が掲載されているほか、木製の模倣剣も作られている。これらは古代の神剣のお姿を拝見できる貴重な存在となっている。

木製で模倣された布都斯御魂の剣


月山貞一作刀のレプリカ。筆者が１５年前初めて取材したとき撮影したもの

これらを見ると、前回でも紹介したようにわずかではあるが、刃のあるほうに曲がったいわゆる「内反り」の刀であることがわかる。古代刀の一部がなぜ内反りかは、メモ１に紹介したように技術的な問題のようである。

菅政友が教部省に報告した長さは２尺８寸６分（８５.８センチ)。これが素戔嗚尊の剣なのだ。そう信じていた。

ところが、今回、石上神宮に問いあわせたところ、「いや、菅政友大宮司が発掘した剣は、建御雷神が国譲りの時に使い、神武天皇の東征で熊野で活躍した布都御魂の剣です。ご神体として祀ってあります。」と言われた。

メモ１　古代の刀にはしばしば内側に曲がった刀をみる。これは片刃の剣は焼き入れをすると必ず外反りになるためで片刃の直刀を作るには、初めに内反りに整えておき、焼き入れをすることで直刀ができる。内反りの刀はその想定を間違えたもの。両刃の剣は両側に焼き入れるので直刀になる。(備前長船刀剣博物館談)

内反りの刀の秘密

また、剣の使い方で中国でもヨーロッパでも、剣を片手で持ち、楯で防ぎながら突きさして殺傷する。素環頭の輪はその滑り止め。両手で刀を持ち撫で斬りにする日本刀は、我が国独自の刀文化として生みだされたもの。(賀来耕三著「刀の日本史」参照)

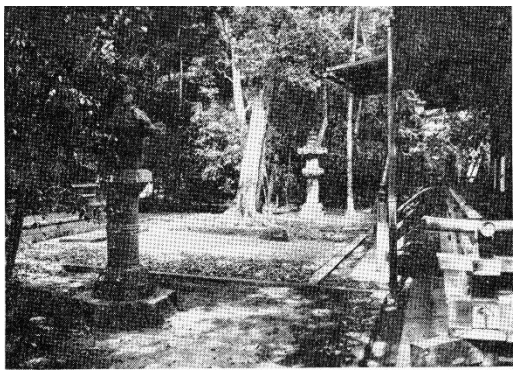
これは大変だ！　前回は間違いだったのか？　安本美典氏は「この剣を建御雷の神が大国主の神に、国譲りをせまったときに帯びていた十握の剣（師霊剣）であるとする説と、須佐之男の命が八俣の遠呂智を斬った十拳の剣(天の羽羽斬の剣)であるとする説との、二つの説がある。」(「邪馬台国と出雲神話　銅剣・銅鐸は大国主の命のシンボルだった」ｐ２１７）と述べていた。間違いではなかった。しかし、両論の詳しい比較はなかった。そこで次項で両説について考えてみる。

＜３＞師霊剣か布都斯御魂か

◎政友の発掘記録

菅正友の発掘状況についての報告書がいくつかの書籍にあった。口語文になっていた大場磐雄氏（註４）の「まつり」からまず引用してみよう。

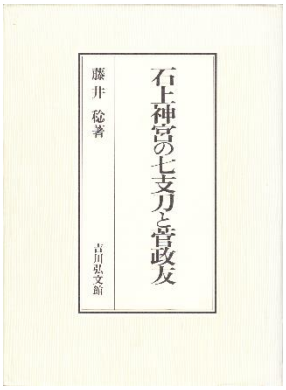
「地方官立会のもとに、場所がら他の人をまじえず神官だけで発掘した。もり土は拝殿から約三㍍ばかり後にあたり、高さ八〇㌢、中央にはカナメの木が一本植えられていた。もり土をとり平らな



明治７年、菅政友が発掘した禁足地。左右の石燈籠の間＝大場磐雄著「まつり」(昭和 42 年刊）から

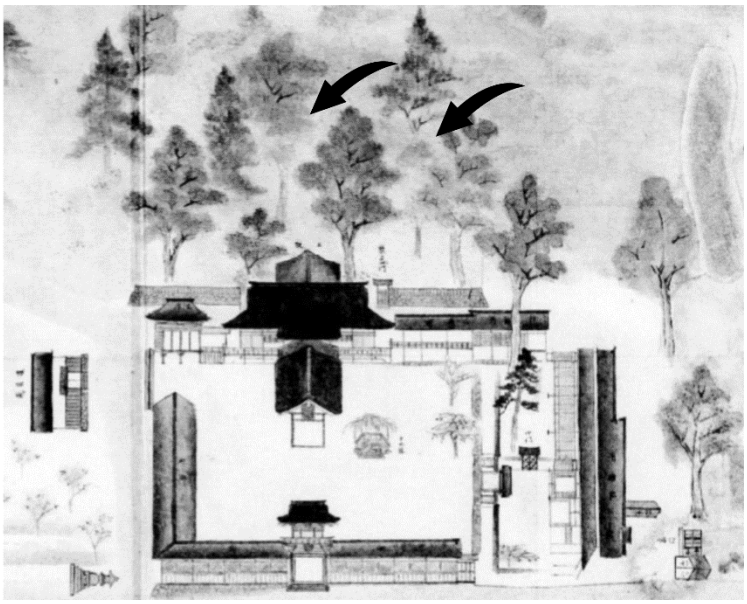
メモ２　菅政友は明治７年の禁足地の発掘以降、それに関する報告書のほかに、交流のあった栗田寛（大日本史志表編者でのち帝国大学教授）と書簡交流をしており「新聞紙抄録」と題した資料群がある。それは新聞資料のメモ書きの裏を使ったもの。天理大図書館所蔵。「石上神宮の七刀と菅政友」では何度も引用されている。

地表より下約三〇㌢のところで、約三㍍四方の広さに瓦がしきつめられ、三〇㌢くらいの石を積み重ねて境界にしている。平地から一㍍下では緑色の曲玉や管玉などが土にまじっていた。とくに中心線より一・五㍍ばかり西側では桙（ほこ）が一つあった。桙の先を南に置いたらしいが、四つに折れていた。又、中心線より東側約一㍍のところで、剣が一振でてきた。鋒（みね）のさきは東に向いていた。この剣は折れたりしていなかった。この他には刀剣はなかったから、この剣こそ韴霊（ふつのみたま）なのである。だからとりあえず、神庫へ大切にしまった。」（同書（ｐ３２～３３、原文は註４に）



◎明治１１年の未刊行資料を駆使

２００５年（平成十七）刊行の藤井稔著「石上神宮の七支刀と菅正友」（写真＝上、註5）の第五章に「石上神宮の禁足地―菅政友による禁足地発掘に関する未公刊文書などから―」という章がある。そこには菅大宮司のメモや書簡など初刊行資料を駆使、政友ワールドを紹介している。例えば菅政友自筆の禁足地の見取り図（図８と記されたもの、下右図）や盟友・栗田寛との書簡により議論の様子を知ることができる。また、当時の同神宮の様子がわかる絵画（下左、註６）も掲載されていた。



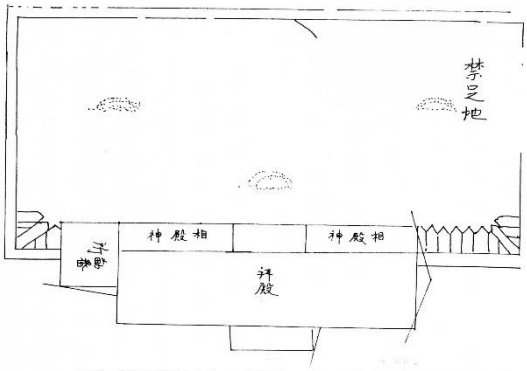
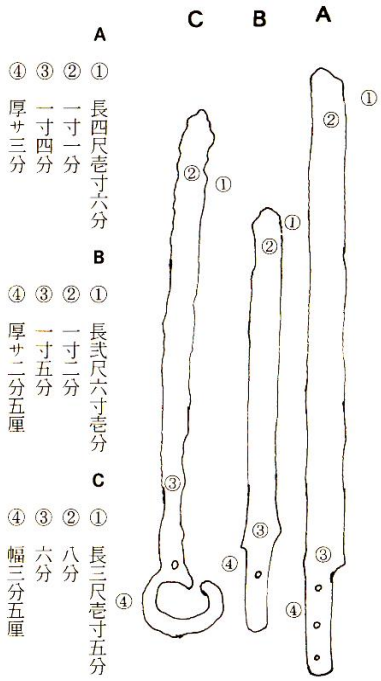


図８『新聞紙抄録』の裏書きにある石上神宮の略図
（原寸縦 30.5 cm　横 22.4 cm　本図は藤井がトレースしたもの）

左が石上神宮官幣社明細帳附属図面（註６）、矢印のところに２つ小円丘がある。上は「石上神宮の七支刀と菅正友」掲載の小円丘の配置図（部分）

明治七年発掘時に出現した剣（中は幅、左は厚み）と同時に出土した鉾の木製部分



二「神宮明細帳」の記述と『古器彙纂』の絵図

図11　刀剣3口の絵図をトレースした図

右の絵図を藤井氏がトレースしたもの。朱書きされた寸法をもとにわかりやすく整理されている。（「石上神宮の七刀と菅政友」p227）

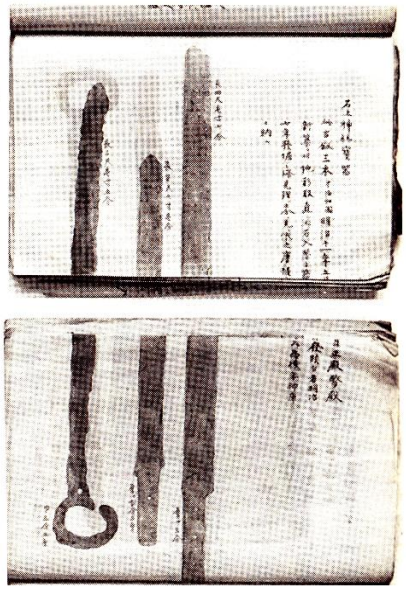


図10　1878年に出土した刀剣3口の絵図（『古器彙纂』より）

明治11年に本殿建設時に出土した3振りの刀の絵図。政友旧所蔵で現在茨城大学附属図書館所蔵の「古器彙纂」から。（藤井稔著「石上神宮の七刀と菅政友」p227）

さらに調査を進めていくと、明治7年の出土の剣のスケッチ（このページ左端）が、神道大系神社編十二(平成元年刊)に掲載されていることがわかった。

同神宮の三つの御祭神の祀り方については社家の森家に伝わる「石上神宮旧記」(佐伯有清著『新撰姓氏録の研究編　第二』註8）が存在し詳しく記載されていた。その部分を安本美典氏が現代語訳（「邪馬台国と出雲神話」ｐ２１１）しているので引用させていただく。

「布都(ふつ)の御魂(みたま)は、この地に鎮まっておられる。それで、この地を、石上布留の高庭の地という。これを名付けて石上振(ふる)神宮という。また、石上神宮という。石上の邑(むら)の地底に、磐石をもってさかいをつくる。地に、石窟をつくる。布都の御魂の横刀(たち)(左の座で、東方である)と、天璽(あまつみしるし)の瑞宝十種(右の座で、西方である)とを、ともにおさめた。その上に、高く地をきずいた。これを高庭の地という。」

「高庭の地。神器の上に磐座をもうけた。神籬(神意の宿るところ）をたて、建布都大神と布留御魂神とを、ともにまつる。建布都の大神をを東の座に奉斎し、第一とする。布留の御魂は、西の座に奉斎し、第二とする。これを、霊まつりの庭(霊畤)といい、神殿はない。」(中略)

「素戔の嗚の尊が蛇を斬った十握の剣は名を天の羽々斬という。また、蛇の麁正という。その神気を、布都斯御魂神という。天の羽々斬は、神代のむかしより、仁徳天皇の五十六年にいたるまで、吉備の神部のもと(今、備前の国の石上の地)にあった。仁徳天皇の五十六年十月二十六日(原文では、十月の一日を、己巳と記すが、甲申の誤りとみられる。誤りを訂正したうえで、千支で己酉と記された日を二十六日に換算した)、物部の首市川の臣(布留の連の祖)は、勅を奉じて、布都斯魂神社を、石上振神宮の高庭の地に遷し加えた。高庭の地底の石窟のうちに、天の羽々斬を、布都の御魂の横刀の左の座(東方)に、加えておさめた。これで、布都の御魂の横刀は、中央になった。その神器の上に、霊まつりの庭(霊畤)をもうけ、あわせて、布都斯魂神をまつり、加えてまつる神とした。」(原文は註８にある)

ということはもともと２つの神籬（小円丘）があり、東側に「師霊神」、西側に「布留御魂神」が祀ってあったのを、東側に「布都斯御魂神」を市川首が仁徳天皇の時に追加したので、「師霊神」は中央になった。８ページの右下の図はまさにそうなっている（三角形の頂点に師霊、西奥に布留御魂、東奥に布都斯御魂の配置)。

政友はこの旧記に基づき真ん中の小円丘に「師霊」があると考えた。まともな判断のように思える。

B5と文庫本の２種。石井昌国氏（刀剣研究家）と黛弘道氏（歴史学者）の名前を表示している。ともに故人。断蛇説はディレクターの意図だろう。

◎本当はどっちなのか？

岡山の石上布都魂神社では、その同じ剣のコピーである「レプリカ剣」（月山貞一作）を布都斯御魂の剣として、昭和九年に奉納され祀っている。不思議なことが起きている。

ＮＨＫの「歴史への招待の推理・草薙剣」では、発掘品について「ぼろぼろに錆びた鉄剣があった。全長二尺八寸、約九十二センチ（筆者追加註　政友の報告数値とやや異なる)、刃の方に反った内反りの大刀で、柄頭の飾りが何もない素環刀大刀であった。剣はただちに本殿（神庫か）に安置され、以来石上神宮のご神体として祀られている。なぜ御神

体として祀られたのか。つまり、八岐の大蛇を斬ったスサノオの十握の剱の伝承と発見された鉄剣がピタッと一致したのである」(歴史への招待 12 推理・草薙剱」NHK 編ｐ１８１）と明確に述べている。

当時から異論があったのだろうか？　今回の文献調査では、ＮＨＫの歴史への招待「推理・草薙剣」と岡山の赤磐関係資料以外では「布都斯御魂説」は見つかっていない。確証が欲しい。

ＮＨＫ出版に問い合わせをした。その放送（名アナウンサーの故鈴木健二が番組キャスターを務めた。放送 1978～1984)、および出版時期（1981 と 1988）の方はすべて退職されておられるはず。担当者の特定も難しいとの返事だった。ただ「著作権の権利関連の調査を受け付ける部署があるのでメールで問い合わせをしてみてはどうか」の提案を受けた。現在、問い合わせ中である。

◎禁足地関連の剣を表に

禁足地関連の剣を整理するために表にしてみた。何か見えそうだ。

禁足地から出土した刀剣と関連刀剣一覧

	剣名または識別名	長さ	幅	形	伝承･文献･似た剣･年代など
明治7年出土	内反素環頭大刀（師霊として祀る）	２尺８寸6分（８5.8㎝）	1寸1分（3.3ｃｍ）	内反り素環頭	菅政友発掘、神道大系神社編12に記録。木製、鉄製の模造
	赤磐石上布都魂神社布都斯御魂影造剣（月山貞一作）	90cm弱	不明	内反り素環頭	昭和　年、奉納を受ける。
	世田谷北澤八幡神社奉納剣（菅原包則作）（註7）	69.8cm	不明	内反り素環頭	師霊大刀模造、明治45年銘、奉納品で出所不明。
明治年十一年出土	（A）背に処々金象眼の跡がある大刀	４尺１寸６分（126.05cm）	１寸2分（3.6ｃｍ）	片刃直刀	背に象嵌あるが文字は不明ご神体と共に神庫に秘蔵
	（B）鉄剣	２尺６寸１分（78.3cm）	１寸2分（3.6ｃｍ）	両刃直刀	鉄剣、（B）と同様神庫に秘蔵か
	（C）素環頭大刀	3尺１寸５分（95.5cm）	８分（2.4cm）	内反り素環頭	この剣も師霊の可能性を持つ。幅が小さく鋭利か
	富岡鐵斎旧蔵刀	78.4ｃｍ	不明	大刀	両刃の鉄剣を改造
	黒田清隆旧蔵刀	102ｃｍ	不明	平棟・平造平棟・平造大刀	十握剣。行方不明で、記録のみ
その他	吉備津神社秘伝剣	目測９０cm	細身	内反り？素環頭	備前→吉備津神社→石上神宮へと流転。

【参考 1】神宮の師霊の木製模造 29 寸 55 分（89.65cm)、鉄製模造 29 寸 35 分（88.05cm)。赤磐の石上布都魂神社のものは鉄製模造で同一品。関連図書は２振り制作とされるが、同神社では月山貞一は予備刀を作っていたと伝わっている。

【参考２】北澤八幡神社の模造剣は大正 3 年におこなわれた大正天皇即位の大礼を記念して献上されたものの予備刀として作られたといわれる（東京都神社庁ホームページ）が、筆者は菅原包則の作刀も、献上のことも確認できていない。

◎メッセージを読み取れ

この表から一つのメッセージが読み取れる。それは石上神宮の祭霊と赤磐市の布都斯★御魂は違うものなのに寸法（長さ）はほぼ同じ。ともにに明治７年の出土剣を元に作ったレプリカだからだ。ところが、本来異なるはずの布都斯★御魂のレプリカである吉備津神社秘伝刀（筆者が仮に命名）も近い。大場磐雄氏の「まつり」（昭和４２年刊、ｐ３６から）に「神剣の寸法比較表」（下表、メートル換算は筆者）が載っていた。

神　剣　寸　法　比　較　表

	全　長	幅	厚さ	反り
一件届書	28.6 寸=85.8cm	1.15 寸= 3.45 cm	0.3 寸= 0.9 cm	0.25 寸=0.75cm
木製模造	29.55 寸=88.65cm	1.15 寸= 3.45 cm	0.21 寸= 0.63 cm	0.25 寸=0.75cm
鉄製模造	29.35 寸=88.05 cm	1.15 寸= 3.45 cm	0.3 寸= 0.9 cm	0.27 寸= 0.81cm

（大場磐雄著「まつり」（昭和４２年刊）ｐ３６の表から一部省略）

それによると、菅政友が教部省に届けたのが８５．８センチだったが、木の複製の模造剣（当時権宮司の富岡鉄斎が禁足地の榊を使い制作）が８８.６５センチ、月山貞一の鉄製模造剣が８８．０５センチと少し大きくなっている。赤磐市の石上布都御魂神社の鉄製模造刀も当然この寸法だと思われる。

吉備津神社のものも目測でほぼ９０センチとのことで、誤差の範囲に収まる数字のように思える。ただ、目撃者の方々も寸法を測る余裕もなかったし、信仰上も避けるべきとお考えのようであった。したがってこの数字はあくまで目測の数字であることを配慮すべきだろう。

◎剣の先に大きな欠損

ここで８ページの明治７年の出土剣のスケッチを見てほしい。先端から数センチのところに大きな欠損がみられる。

ＮＨＫの「歴史への招待の推理・草薙剣」（ｐ１８１）を再び開いてみると、「時に素戔嗚尊……十握の剣を抜きて寸に其の蛇を斬る。尾に至りて劔の刃少し欠けぬ。」と「日本書紀本文」から引用したあと、「すなわちスサノオの剣は、大蛇の尾の中にあった剣とカチンとぶつかって、刃こぼれをしたというのである。ところが禁足地から発見された鉄剣にはこの伝承と同じ刃こぼれのあとがはっきりとあったのであった。」（同）とある。８ページのスケッチと日本書紀の記述を単純に結びつけたのであろうか。

剣の欠損だけでなく、ほかにも根拠があるのかもしれないが、神話と歴史を結び付ける

には少々大胆すぎないか。この判断は後世に譲りたい。しかし、石上神宮の高庭は、室町期の社会的な混乱の中で作られたのか、また、古代からの祭祀方法なのか判断しかねる。

おそらく、古くからの祭祀方法の上に緊急的な埋納で神宝を隠したということなら、正中央の小円丘だけに、主祭神の師霊が納まっていたとは言えないだろう。

藤井稔氏は「石上神宮の衰微を嘆く政友が本殿造営を計画してい たことも密接に結びついていたことがわかる。」（同ｐ１９１）と当時の政友の心境をのべている。そのためにも出てきた一振りの剣は最も大切な師霊でなくてはならなかったのだろうか。

◎室町期に埋納の認識

政友は栗田寛への手紙の中で神剣出現時の詳細な記録を別途残していた。「其埋メタル体ヲ想像仕候ニ、俄ニセシコトト見エテ如何ニモ麁略ナル事ニ御座候。（略）其埋メタル時代ハ何時トモ計り難ケレト、恐クハ四五百年ヲバ出ヘカラス。其証ハ埋メタル瓦ノ古カラヌ、桙ノ柄ニ銅ヲ巻タル中二木ノ朽残リタル、宋ノ貨幣ヲ埋メタル、此等ヲ以テミルニ、疑フラクハ足利氏以往ノ事ナランカ。当時武人ノ横暴甚シク、（略）御霊代ヲ置ベキ所モナケレハ、遂ニ地ニ埋タルノ一挙ニモ至リシナラン。此ハ昔日ノアリサマト、埋メタル形状ニヨリテ、憶説ヲナセシナレハ…」（同ｐ１８９）と埋められたのは室町時代と認識していた。政友が神剣とした剣は「身だけの状態で鋒端を東南に向け、斜めの状態で出 土したこと」も記されていた。慌てて丁寧な埋納ではなかったようだ。

◎難しい断定

そうなると明治１１年出現の「（Ｃ）素環頭大刀」などの５振りのうちいくつかは師霊の候補になる。特に（Ｃ）は長さは３尺１寸５分（95.45cm）で、明治７年剣より１０センチほど長い。素戔嗚尊は天照大御神と兄弟、伊都之尾羽張神も伊邪那岐の子で同じころ生まれ同世代、その子が建御雷神なので１世代１８年の開きとみてよいだろう。その間に劔の制作技術の進歩もあっただろう。ただ、天照大御神は初期の卑弥呼と後期の台与の２人を合わせて表現されているという説も考えれば、１世代半～２世代後ともいえる。

また、当時、素環頭鉄剣の環頭部分を切断し茎をもうけるなどして、柄をつけるという改造が見られているので、素環頭大刀以外の（Ａ）、（Ｂ）、富岡鉄斎旧蔵刀、黒田清隆旧蔵刀も対象になる。

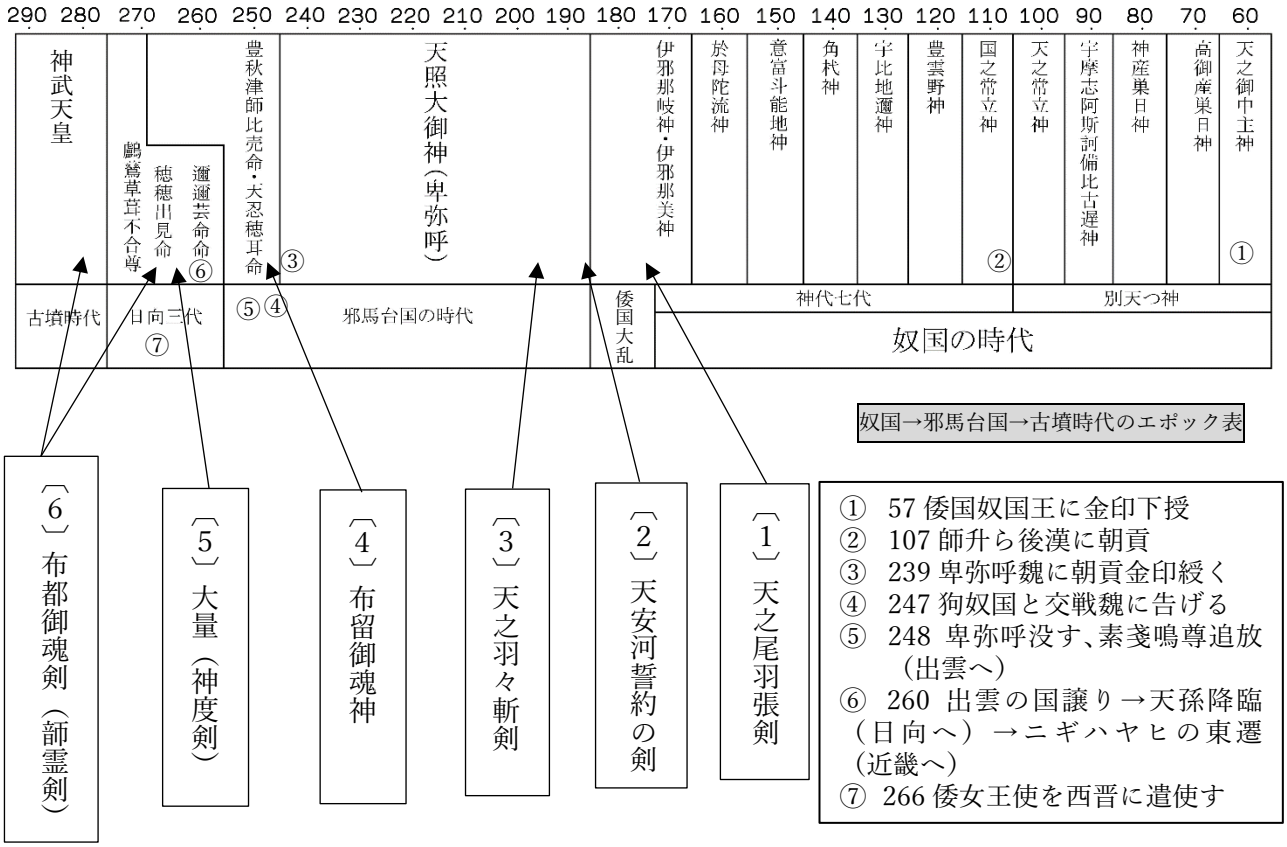
どの剣を「師霊」とするかの結論は、明治７年の素環頭大刀がご神体となっており、同１１年発掘のものも、多くはご神体と同じところに安置されている。将来とも断定は難しいといわざるをえない。

＜４＞考古学的にどの時代か

◎神話時代特定の指標に

布都御魂と布都斯御魂の剣の絶対年代を知りたい。それには記紀や倭人伝から見ればある程度わかるはず。剣の年代を相対的に見ようとこの下の表を作った。「奴国」に詳しい河村哲夫氏の古代年代表は大いに参考になった。

神話時代のエポック事象年代表



こうして表にしてみると、今回扱った鉄製の剣は、奴国時代終わりから古墳時代へ入るまでの約１００年間が舞台だった。さらに邪馬台国時代の後半と日向三代の４０年間により多く集まっている。ということは、これらの鉄剣が使われていたのは弥生時代の最後と古墳時代の始まりである。

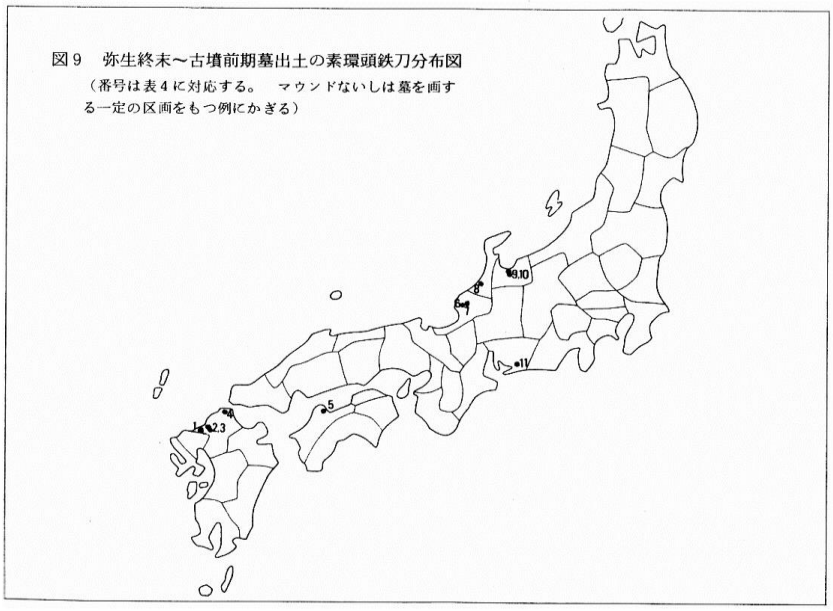
少しデータが古いかもしれないが、今尾文昭氏（註９）の論考に「素環頭鉄刀考」（昭和５７年１２月）がある。その資料として表４と記された「弥生終末～古墳前期墓素環頭の出土地名表」と図９と書いた分布地図（ともに次ページ）が載っていた。１１例の素環

頭鉄刀が取り上げられている。その最初に平原遺跡（福岡）の剣（７５センチ＝その後80.6センチに変更されている）が取り上げられている。最も長い素環頭鉄刀である。次い

表4弥生終末～古墳前期墓素環頭鉄刀の出土地名表(但し、墳丘ないしは墓を画する一定の区画を有す例にかぎる。)

No.	遺跡名	所在地	埋葬施設	長　さ (単位cm)	伴　出　遺　物	備　　考	文献
1	平　　原	福岡糸島郡前原町曽根	方形周溝墓 割竹形木棺	75	方格規矩鏡35面、四螭鏡、内行花文鏡、玉類		1
2	藤　　崎	福岡市西区 百道、藤崎ほか	割竹形木棺	69. 03	三角縁二神竜虎鏡	地下1.65mより出土。古墳?	2
3	藤崎６号方形周溝墓	同上	箱形石棺	56.6	三角縁二神二車馬鏡、刀子、鐘、鉄鏃	方形周溝墓台状部幅13.5m	3
4	郷　　屋	福岡　小倉南区長行	方形周溝墓 箱形組合式木棺	39.7	三角縁四乳四禽文鏡	高さ1m、径20mの墳丘に4基の石棺が存在する	4
5	唐子台第１４丘	愛媛　今治市桜井	箱形石棺	66	内行七花文鏡、丸玉、玉、管玉、勾玉、剣		5
6	風巻	福井　丹生郡清水町	土壙墓				6
7	原目山２号丘、５号土壙	福井　福井市		（小刀）			7
8	寺井和田山９号墳	石川　能美郡寺井町	木　棺			2号丘は一辺30m、高さ4 mの方形台状墓	8
9	杉谷2号方形周溝墓	富山　富山市杉谷	土　壙	45	ガラス小玉	方墳一辺28. 5m x22m、高さ3. 85 m	9
10	杉谷3号方形周溝墓	同　上	割竹形木棺	45	ガラス小玉、不明鉄器	北側周溝内より北陸第1様式（月影式)併行期土器出土 方形周溝墓一辺11m	同上
11	波ノ上１号墳	愛知　豊橋市牛川町	木　棺	69	長頸壷	円墳高さ1.5 m、径20m、欠山時期住居址直上に築造する。柄梅えは呑口式、断面菱形の素環頭鉄剣と報告されている。	10

で藤崎遺跡（同）の素環頭鉄刀（６９．３センチ)、波ノ上１号墳（愛知）と続き、郷屋遺跡（福岡）同が３９．７センチ（長さ不明２件）で、いずれも明治７年政友が掘り出した剣（８５.８センチ）より短い。１章の〔２〕天安河誓約のところで、天照大神は「十握剣・九握剣・八握剣を帯き」と紹介したように小さめの刀も同時に存在していた。「この考古学的の年代」と、「神話時代の剣の年代」を重ね合わすことは整合性

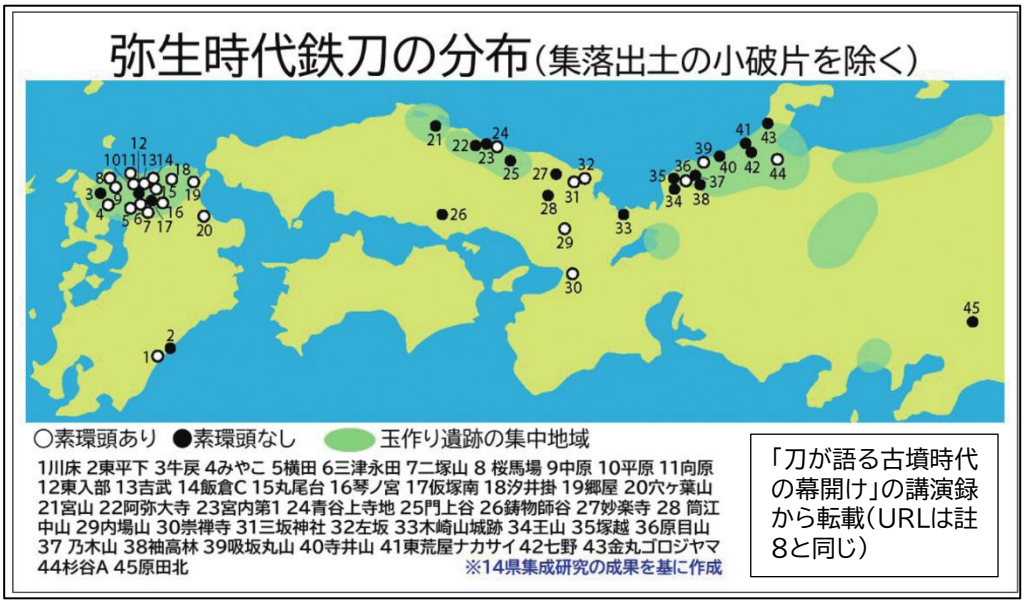


が取れそうだ。すなわち我々は神話時代を特定する指標を神剣により得たといえる。

http://inoues.net/yamahonpen15.html

メモ３　**直刀だった平原遺跡の剣**　平原遺跡出土の素環頭大刀は、出土時はいくつかに分かれていた。平成１８年（2006）の国宝指定以前は下の写真のように内反りのように復元され公開されていた。国宝指定を受けるにあたって、修理を依頼したところ、直刀だと判明、今のかたち（写真上、糸島市 HP から）になっている。下の写真は邪馬台国大研究に今も掲載されているもの。平原遺跡は大鏡が出土、天照大御神（卑弥呼）の墓説をとる人もいる。特別の遺跡であるうえに、古代刀は内反りが多いという先入観で復元されたのだろう。

◎出土地と重なる国譲り神話



「刀が語る古墳時代の幕開け」の講演録から転載（URLは註８と同じ）

全国の 14 県で連携し共同調査・情報発信をしている古代歴史文化協議会（註１０）によって２０２２年３月に「刀剣が語る古墳時代の幕開け」と題する講演会とシンポジウムが岡山県立美術館で開催された。（新型コロナ感染防止の観点からネット配信で開催）。今回のテーマと重なる。基調講演とシンポジウムの様子がネット上にＰＤＦファイルとＹｏｕＴｕｂｅで公開されている。弥生時代から古墳時代への鉄の刀剣の移り変わりを地域ごとの視点で考古学者が意見を述べていた。

それによると石川県の林大智氏は「北部九州にそれほど遅れることなく、鉄製武器が導入された。日本海沿岸域では、鉄製刀剣の副葬が弥生時代後期前葉から始まり、続く弥生時代後期後葉には、日本海沿岸域で鉄製武器を副葬する墳墓が増加、北陸の東端に位置する新潟県村上市の山元遺跡まで到達します」と素環頭太刀の普及が、北部九州に次いで早いとしている。

同じ日本海沿岸の福井県の三原翔吾氏は鉄剣について「北陸の中で一早く入ってくるのは、弥生時代後期後半、墳丘長30ｍを超える小羽山30号墓（剣が1 点）、その後も福井平野東部に大型の刀剣類を複数もつような墳丘墓が出現し、墳形によって大きく鉄器の様相が変わってきている」と述べてえいる。その理由について、隣県の林氏が「終末期には素環頭剣や刀がさらに多くなる。この時期は、朝鮮半島東南部で、武器が“短剣”から“素環頭大刀”や“長剣”など変わっている」と朝鮮半島の事情を反映した理由として挙げている。

同じ講演会で基調講演を行った石川日出志明治大学教授（註１１）も「九州に根付いた鉄製武器の流通そしてそれをお墓に副葬するという流儀は特に日本海ルートで山陰にそして北陸へと普及いたします。（佐賀県の）桜馬場のように、九州の武器や装身具を副葬する流儀が北陸まで普及している。こういう鉄製武器の副葬あるいは装身具、これはガラスも入ってくるかもしれない、その副葬はずっとさらに東に、長野県まで確認することができます。長野県の根塚遺跡では、三本の鉄剣が出てきて、そのうち一番長い 74 ㎝の長剣の柄のところに渦巻飾りが三つついて、これは韓国、朝鮮半島島南部の釜山・金海周辺、あの一帯で流行ったデザインであります。（略）さらに、北方、東北地方、北海道にまで鉄製品、鉄製武器などは広がっています。このように日本海側を中心としてですね、大陸に由来するものがかなり広く日本列島内に流通している。こういう日本海側を中心とする相互交流の蓄積があるということであります。それが弥生時代後期。」と述べている。

北部九州に伝わった鉄製武器は、瀬戸内海側に向かうと思いきや、日本海連携を通って出雲・越へと広がった。

記紀に記されていたように天照大御神、素戔嗚尊、大国主命、奴川姫、建御名方とつながる日本海文化圏域に広まっていた。しかも、その地域は、出雲の引佐の浜で国譲をした大国主の支配地域そのものだ。考古学者らはそれを自覚なく語っていた。考古学的発見が神話通りに反映しているといえそうだ。

◎ルーツは大陸か

先の石川明治大教授は素環頭鉄刀の国内流入について次のように述べている。

佐賀県三津永田遺跡の素環頭鉄剣

「日本列島に武器としての鉄製の刀剣がもたらされたのは、弥生時代中期後半。中国や半島経由で入手した鉄の素環頭や鉄の剣が普及し始め、それをお墓に入れるようになる。例えば中期後半の福岡県飯塚市の立岩遺跡では、鏡と一緒に鉄製の武器が入り始める。さらにほかの墓でも鉄製の武器、剣、矛などが入ってくる。中期後半段階、紀元前１世紀段階では、武器副葬が点々とみられ、後期になると九州北部、福岡界隈ではかなり明瞭に認めることができる。佐賀県唐津市の桜馬場遺跡では、残念ながらずたずたになっていたが、かなり長い素環頭の大刀が入ってた。それから、吉野ケ里遺跡のすぐ近くの三津永田遺跡にも素環頭の大刀がちゃんと入っている。それから、この二つの遺跡、桜馬場も三津永田も弥生時代後期といっても一段階下る。初頭とは言い難い。もう一つ、物はないが、注目すべきは井原鑓溝遺跡で、江戸時代に鏡数面見つかったところの記録の中に『鎧の板のごときもの、また刀剣の類あり』という。この時期に鎧はないので、大刀か刀剣の類が傷んで、そしてバラバラになって、これを記録に残した青柳種信が、鎧のごときものという判断をしたのだろう。後期の早い段階から鉄の刀剣が入っていた。後期になると、鉄製武器の副葬の一般化と同時にガラス製品の普及もかなり明瞭に読み取れる。中期段階とは桁が違う。一つの墓から数千個出てくるという事例も確認されている。」（同講演録の一部を要約）

環頭大刀　金海良洞里　三韓（3世期）長67.5㎝（右）。筆者が韓国ツアーで訪れた国立金海博物館図録掲載のもの。左は内反りとなっている

三津永田や井原鑓溝に続くのが平原である。平原の剣は直刀であることが判明しているが、内反りが技術的問題とすれば、長さは平原が７５センチ、明治７年出土の十握の剣（ここでは師霊と布都斯御魂）が８５．５センチと若干違うが、１５ページの剣の写真と、８ページの菅政友のスケッチを見比べると、２つは酷似しているといえよう。

当然、剣の制作地は大陸や半島製のものもあるが、徐々に国内鍛造に変わったであろう。古事記の岩戸開きの場面では「天の安の河上の天の堅石を取り、天の金山の鐵（まがね）を取りて、鍛人天津麻羅（かぬちあまつまら）を求（ま）ぎて、伊斯許理度賣命（いしこりどめのみこと）に科（おほ）せて鏡を作らしめ…」（「岩波文庫」倉野

憲司校注「古事記」ｐ３６）とある。岩屋戸事件で、剣を使った記述はなかったので剣は鍛造しなかったが、金属を扱う神・天津麻羅（あまつまら）がいたことがわかる。「鍛人（かぬち）」と言い、おそらく鍛冶職人だろう。すなわち、この時期には鉄や銅の鉱石、あるいは砂鉄類を集め、たたらでの精錬、鋳込み、鍛造などの職能人がいたことになる。「鐵（まがね）」といっているので。この時作った鏡は「鉄製」となるが、万葉仮名の「まがね」であって、文字は校註者や筆録者の解釈も入る。断定できない。日本での鏡の出土状況から見て銅鏡だったろう。

高天原時代、言い換えると邪馬台国時代には輸入刀剣もあったし、邪馬台国でも剣を作っていた。それらのいくつかが神の剣になったのだ。

＜おわりに＞

中国起源の剣だが以上のように北部九州に入った素環頭鉄剣はそれまでの銅剣に比べ、その鋭利さは驚くほどのものであったに違いない。それゆえか鏡も剣も単なる“もの”から“神”そのものになっていく。矛の神話化（奴国の神）に続いて、新しい神の誕生だったのだろう。

その象徴として伝世され、石上神宮に集まった三つの剣（「師霊」「布留御魂」「布都斯御魂」）は神となった。さらにそれより大きな神格を持つ「草薙の剣」が、日本の古代世界に君臨することになった。そして、三種の神器の継承がいまも御代かわりの最大のイベントとなっている。このような国はこの国を除いてないであろう。

＜注釈一覧＞

（註１）事戸（ことど）とは　日本書紀では「絶妻（ことづま）の誓（わた）し」と書いており、夫婦の離婚の宣言の意。伊邪那岐と伊邪那美が黄泉比良坂で千引きに石を隔てて伝え合った言葉（一種の離縁状）を交わした。

（註２）都牟刈（つむがり）の大刀　素戔嗚尊の八岐大蛇退治の時、その尾から出てきた大刀で、草薙の剣を指す。別名に天叢雲剣（あめのむらくもつるぎ）もある。ツムカリというのは「摘む」「刈る」の意味で、収穫の時に使う鉄製品との説もある。この剣が銅剣か鉄剣かで議論があるが、熱田神宮の奥深くに納まり誰も見ることができない。

（註３）初代月山貞一（がっさんていいち）　明治-大正時代を代表する刀工。1836－1918　帝室技芸員、大正元年伊勢神宮奉納の刀をつくる。明治７年の石上神宮出土の素環頭鉄剣の模造（景造）刀を手掛ける。公式には２振りとされているが、石上布都御魂神社（赤磐市）での伝承では、予備があった。計３振りのうち１振が内侍所（賢所）にも収められたと伝わっているが、確認できる話でないとされている。予備剣が奉納されたものという。なお、刀剣に関心の高かった明治天皇には出土剣をお見せしたともいわれている。

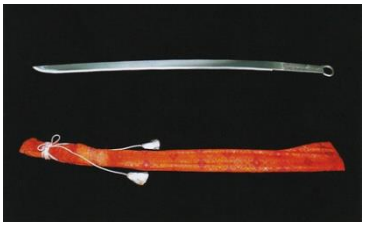
（註４）大場磐雄（おおばいわお）　（1899～1975）日本の考古学者。國學院大學教授。本人が「私の考古学はただの考古学ではない。考古民俗学（または民俗考古学）だ」と言うように、文献史学・民俗学・考古学三位一体のスケールの大きな古代研究が特徴。神道考古学を体系化した。「まつり」掲載の「禁足地発掘用録」（石上神宮の教部省への正式報告書）原文は下記の通り。

「兼テ伺済相成当社禁足地之儀本月廿午前七時ヨリ地方官立会尤場所柄二付一社人員而巳ニテ他人ヲ不交発掘仕候卜件左記二大略申上候。嘗テ入御聴候一封土ハ拝殿後正中壱丈許リ後二テ高サ二尺八寸余中央ニカナメノ木壱株有之（太サ弐尺五寸埋メ候テ植エシモノナラン）右平地ヨリ下凡壱尺余に至レハ一面二瓦ヲ以テ之ヲ蓋に壱間半四方許モ可右之歟尺或尺余ノ石ヲ積重ネ境界ヲ成シ候様子二御座候。平地三尺許リ下二緑色ノ曲玉管玉等甚ダ多ク上石ニ交リ有之殊ニ正中ヨリ五尺許西側ニ桙ー柄鋒端ヲ南ニ為シ置クルサマナレドモ四ツニ折レ柄モ金物ノ所而巳朽残り是又三ツニ折有之、又東側正中ヲ距ル事凡三尺許ノ地ニ鋒端東ニ向ヒ劔一振出現此ハ折損シ候所モ無焦之共他刀劔様之物一切無之候間伝説如ク此劔ふるのナルコトフベキニアラネバ不敢仮ニ神庫へ鎮安仕置候云々」

（註５）藤井稔（1958～）奈良県橿原市生まれ。天理大学文学部国文学国語学科卒、現在天理高校教諭。菅政友の未刊行資料をもとに「石上神宮の七支刀と菅政友」を平成１７年（２００５）に刊行。七支刀をはじめ、明治１１年出土の鉄剣など政友の書き残したメモ類も見られる。

（註６）石上神宮官幣社明細帳附属図面　明治政府による官弊社の記録集。奈良県奈良県立図書情報館 まほろばライブラリーに登録されている。以下 URL
https://meta01.library.pref.nara.jp/opac/repository/repo/673/?lang=0&mode=&codeno=#?c=0&m=0&s=0&cv=48&r=0&xywh=0%2C-22%2C2488%2C1795

（註７）４つ目の師霊の模造剣（北沢八幡神社所蔵）　国学院大学は平成 31（2019）年に特別展「神に捧げた刀―神と刀の二千年―」を開催、北澤八幡神社（東京都世田谷）所蔵の大刀＝**写真**＝を展示した。全長 69.8cm の内反素環頭で、「師霊、大刀模造 明治四十五年二月日」「帝室技芸員菅原包則八十三歳作」の銘文が彫られていた（東京都神社庁 HP＝http://www.tokyo-jinjacho.or.jp/goshahou/goshintou/から、写真も）。入手の経緯は「氏子から奉納」される。長さはこれまでの師霊の記録と大きく異なる。１０ページの【参考２】に関連の記事がある。



（註８）石上神宮旧記　石上神宮の社家森家に伝わる文書。評価はまちまち。石上の御布瑠村の高庭とのタイトルがつけられ、旧記にはではじまる。以下原文は下記の通り。
「布瑠御魂神鎮二坐于此処一。爾来号二其地一曰二石上布留高庭之地一。故因名レ之日二石上振神宮一。又曰く二石上宮一。石上邑地底以磐石一為レ境、作二地石窟一。以二布都御魂横刀（左坐為二東方一）天璽瑞宝十種一（右坐二為二四方一）同共蔵焉。其上高築レ地。謂二諸於高庭之地一」とあり、さらに「高庭之地。当二神器之上一設二磐座一。立二神籬一並祭二建布都大 神、布留御魂神一也。以二建布都大神一奉レ斎東座一為二第一焉。布留御魂神奉レ斎二西座一為二第二一。謂二之霊畤一而無二神殿一。布留御現横刀之鋒向レ天而頭（俗伝都加）植レ地。所レ謂十握剣倒植二於地一是也。高庭之地裁レ椙為神木一。似二剣倒植之象一矣。所レ謂石上振神椙是也」とある。また同じく『石上神宮旧記』に「五十六年孟冬己巳朔己西。物部首市川臣（布留連祖）奉レ勅遷二加布都斯魂神社於石上振神官高庭地一。高庭之地底石窟内以

二天羽々斬一加二蔵于布都御魂横刀左坐一（為二東方一）。是布都御魂横刀為二中央一之故。当二共神器之上一。設二霊畤一幷祭二布都斯魂神為二加祭之神一」とみえる。（新撰姓氏の研究考證篇第二　佐伯清編ｐ３６０）

参考になるサイトに「べにーの Ginger Booker Club 」「石上神宮」がある。URL は次の通り。https://bennybebad.hatenablog.com/entry/2016/03/22/215833

（註９）今尾文昭（いまおふみあき）　（1955 年～）奈良県立橿原考古学研究所総括研究員など歴任。紹介論文は同研究所紀要「考古学論攷第８冊」に所収。

（註１０）古代歴史文化協議会　全国の 14 県（埼玉県・石川県・福井県・三重県・兵庫県・奈良県・和歌山県・鳥取県・島根県・岡山県・広島県・福岡県・佐賀県・宮崎県）で連携し共同調査・情報発信をしている。今回の発信 URL は以下の通り。
https://kodairekibunkyo.jp/lectures_5th.html

（註１１）石川日出志（いしかわひでし）　（1954 年 11 月 27 日～）　日本の考古学者、明治大学教授。福岡県志賀島出土の金印について、多く論文を発表し「真印」とする。『「弥生時代」の発見・弥生町遺跡』などがある。

著者プロフィール：石合　六郎（いしあい・ろくろう）

昭和 20 年 4 月、岡山県倉敷市児島に生まれる。立教大学文学部卒、昭和 44 年山陽新聞社入社、政治部、整理部、東京支社編集部などを経て、システム部署で新聞データベース構築に携わり、平成 17 年システム局次長で退職。同社嘱託を経て、川崎医科大学に勤務、同 19 年退職する。

東京支社時代、取材で同郷の安本美典氏と知り合い、邪馬台国九州説に共感、その後、九州の遺跡探訪中に福岡歴史研究会の大谷賢二理事長と知り合い、同研究会古代史講座を立ち上げ、講師も務める。同会の古代史イベントを担当、歴史ツアーなどを企画、運営。地元吉備にも興味を持ち、伝承を調査研究。現在、同研究会副理事長。現住所は岡山市中区。